
彼女。

廣瀬 るな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女。

【著者名】

廣瀬 るな

【ISBN】

97898990

【あらすじ】

尊大で利己的で、そのくせナイーブ。頭と軀がまるで一致しなくて、大切にしたいのに壊してしまう。そんな少年期の不条理な恋の話。

プロローグ（前書き）

セックスの描写が有ります。苦手な方は御退出願います。

作風が ハロン・シーレ。かなり寒いです。

また、Left Alone 及び Pain の別の側面になります。内容の重複をご容赦ください。

こちらだけでお読み頂いても分かる内容になつていると思います。

プロローグ

俺たちの、いや、俺の10代は青かつた。

正論を吐きながら自分の事ばかり考えて生きていた。

それが正しければ他人を傷つける事なんか二の次で。

街ですれ違う高校生達。ふざけてはしゃぐ姿は今の俺から見ると子供の様に思うのだけれど、その当時にしてみればいつもぱしの大人気取りだったと恥ずかしくも思う。

世の中の事が分り始め、大人の言動に欺瞞を感じ、どうやつて生きていけばいいか考えられる様になり。それでも自分が選択した道は決して間違いではないと。

いつだつて中心は自分だった。

他人の痛みを分るような気持ちになつて、そのくせ色は白と黒しかなくて。

相手の立場になつて考えているつもりが、どうしようもないってことが有るつてことに気づかず、俺である事だけを通し続けた。

俺はあの頃から変わった事が出来たのだろうか。

もしかしたら自分が思つてはいるより変化は無いのかもしれない。

それでも今の俺はこの現実を生きている。

どうすれば良かつたかなんて、今更言つても始まらない。過去は変わらない。それでも過ちから学ぶ事が出来るつてことは身にしみてよく分つた。

俺は一度と間違いたくはない。

本当に大切な唯一つ、それを過たない様に。

第一話 恋人（前書き）

いろいろな意味で生きしい描写に力を入れています。
苦手な方は絶対に入らないでください。

第一話 恋人

確かに亜由美と別れたのは3月に入つてすぐの晴れた日だったと思つ。

「ねえ基^{もとき}、大丈夫、今日、安全口だよ。」

そう彼女が言つたから。

その日に限つて俺はゴムのストックを切らしていく。だから諦めかけていた時の事だつた。

一気にテンションが下がつた。

その事の意味を考えもしない彼女に無償に腹が立ち

「もし出来ても、俺、産んでなんて言わねえぞ。」

威嚇のつもりで顔を近づけ囁いていた。俺たちは高校生でお互い責任なんて取れないんだから。だから、いい加減にしろ、と。

そのとき思い出したのは以前抱いていた女の事だつた。

彼女ならば絶対そんな事言わないはずだ、と。

彼女とする時はいつも俺の部屋と決まつていて。

その日もいつもの様に静かに横たわる彼女にキスしながら、ベッドの脇にいつも有るべきものを探した。

「無いや・・・・。」

そう言えばこの前した後、買い足しておくのを忘れたんだ。

この時俺は駄目モトで聞いてみた。どうせ彼女の生理は2ヶ月に一回有るか無いか。おぼろげな知識でそれが不妊体質の兆候だつて知つてたから。

「今つてさ、安全口だつたよな。」

彼女は一瞬きょとんとした表情になつた。この時の俺は期待している顔をしていたんだと思つ。そこをドンピシャのフックでぶん殴られた。

「やらせるはずねえだろう、この馬鹿が！」

彼女は起き上がると痛んだ拳を握りしめ、

「俺、妊娠するのも嫌だし、墮ろすのも嫌だからな。」

そう低く吐き捨てた。

あ、そうかつて。こいつにかかると俺はいつまでも子供だ。セックスして射精すりや妊娠する。そんなのは当たり前だと分つているけど、それが現実世界でどう言う意味を示すのか、俺にはちつとも分つていなかつた。

「ご免。」

正直怖かつた。

もし出来て、彼女と一緒に産婦人科の門をくぐり、診察室で待つ。こいつの態度は目に見えていた。

「どう考へても産めませんから。」

そつ言つて拳を握るんだ。

保健体育の時間に見せられた墮胎される胎児のHモー映像が俺の頭の中に浮かんだ。殺さないでくれと言わんばかりに逃げ惑うあの姿を。女の勇利はそれをリアルに自分の中で再現できるんだって感じた。

「今から買いに行くから。」

なんて言えなくて。

「ご免。」

そう言つて彼女を玄関まで見送つた。

「そんなつもりじゃなかつたんだ。」

そういうながら

“そんなつもり”
つてどんなつもりか言い訳を考えた。

「思つてもいいくせに。」

彼女は俺に聞こえる声で呟いた。

殴られた左の頬がじんじんと熱かった。

その彼女と比べてしまい、余計に田の前の亜由美に腹が立ち
「もう、駄目だよ、俺たち。」

本気で嫌になりそう言っていた。

「合わないんだよ、何もかも。俺はやらなきゃいけない事があるのに、お前は俺の事縛るうとするし。今度は避妊無しでもいいなんて、おかしいよ。俺も子供だけど、お前、女だろ？できて困るの、お前なんだからさあ。もう少し大人になれよ。」

すると彼女はぎゅっと唇を噛み締め、何も言わず服を直した。

「別れよ。」

タイミングを見て言い、素直に頷いた彼女にほつとした。

亜由美から告白されて付き合い始め3ヶ月に入ろうとしていた。短いようで長かった。

確かに彼女は可愛くて素直でそれなりにわがままで。男にとつて理想的な女の子だったと思う。でも俺の中では何かが違っていた。彼女といふときより、勇利といふ時の方がもっと俺が俺らしくいれる、そんな気がしてならなかつたから。だから彼女とは潮時だつたんだ。

彼女は送ろうとする俺の手を振り払い、

「比べないで！」

そう言つて出て行つた。

俺は彼女の言つてゐる意味がよく分つた。と同時に、それが亜由美にばれていたつて事に愕然としていた。

第一話 親友（前書き）

ドン引きの予感がある人は、直感に従われての御退出をお勧めします。

第一話 親友

その頃の俺は拳闘部に所属していた。高校に入つてから始めた口だつたが、自分で言うのもなんだけど2年に上がる頃にはそれなりのものになつていたと思う。

それというのも、全て勇利のおかげだつた。

彼女は物心ついた時からのボクシング狂で、三度の飯よりボクシング！と言つてはばからなかつた。入学したその足で、ボクシングやろつかなあ、なんて漏らした俺を引きづり一人入部届けを出していた。

それ以来の付き合いだ。

彼女の夢は、自分の手で有名なボクサーを仕上げる事。

そして俺はマネージャーの彼女に従い、ひたすら練習を重ねた。二人三脚の日々だつた。

女の名前が

“ 勇利 ”

なんて、変だらう？あいつの本名は

“ 山口 遊里 ”

つて書いた。その意味を知らないヤツつているのかな。歓楽街、風俗街の昔の呼び名さ。

あいつの言葉で言つと

“ ソープランド山口屋 ”

になるそうだ。だから、嫌だと。

さすがに男の俺でも引いたさ。自分の名前が

“ 間男 ”

とか

“ 色魔 ”

つてのと同じレベルだと思うから。

彼女はテレビの話でもするかの様に何気なくその事を教えてくれた。学校の許可ももらい通称名を使っているのだと。確かに高校の名簿は

“ 勇利 ”
の名前で統一されていて、彼女が話さなければ俺はその訳をずっと知らずに來ていたと思う。

俺はなんて声をかければ良いか分らず戸惑い、勇利は反対に済まなそうな顔をした。だから

「いいじゃん。」

なんとか言葉をつなぐ。

「 勇利は勇利だ。他の誰でもない。」

そう言つて俺は立ち上がつた。
部の開始時間が迫つていた。

彼女は学校での私服も仕草も気質もまるつと

“ 男 ”

だつた。その上元が綺麗な顔をしているから、ジャーー系といわれれば正にそれだ。

もちろん性別が女である事には変わりないけれど、変わり者の多い学校だつたのでそれなりに受け入れられていたと思う。

カットハウスのモデルで切つてもらつたというかなり短めの髪を、長くて似合わないからとクラスの女の子に手直ししてもらつて喜んでいたり。

応援部の演習に参加していて

「 声、小っちゃんじやねえの？」

なんて怒号がましたり。

身長も165cm ほどだつたから女としては大きい方だ。

でかい声で明るく笑い、もちろんスカートなんか一度もはいた事が無かつた。

ボクシングに関しては抜群に優秀な彼女は1年の時からトレーナ

ーを兼務していて、俺たちにハードなトレーニングを提示して来た。それでも誰も文句を言わなかつたのは、選手とほぼ同じ量のロードワークを彼女自身、一緒にこなしていたからだ。細い割には筋肉質の体。彼女は俺たちの集団の中に違和感無くとけ込んでいた。

俺たちは性別に関係なく親友だ。そう信じていた。

その関係がある時を境にバランスを崩す事になる。

それは新人戦で勝ち残り、浮かれまくつている時に起きた。

ブロック大会の決勝の相手は畠山孝之という優勝候補で、こいつの事は練習の時に勇利からの情報でしつかり聞いていた。責め方、苦手な技、疲れて来た時の癖なんか。どうしてそんなに詳しいのか不思議だつた。

「まあな、実は昔の知り合いなんだよ。」

彼女は曖昧に笑つた。その時は特に気にせず、さすが勇利だと思つただけだつた。

そして決勝は接戦だつた。ぎりぎりの判定だ。だから勝ちが決まつた瞬間、俺は勇利を抱き上げ喜んでいた。

みんなからの祝福の拍手。右の拳を突き上げ、俺たちはガツツボーズを作つた。

試合が終わり俺は控え室へ。それからふと思いつ立ち勇利を探しにいつた時、その声は聞こえた。

「今でもダツチワイフしてんの？」

男の声は切羽詰まつていて。

もみ合ひう音に痴話げんかだと思つた。関わる気なんか無かつたから、俺はきびすを返したはずが孝之には関係ないだろう。

それはまぎれも無い勇利の声で。

慌ててコーナーを曲がつたそこには、畠山に被い被さられた勇利がいた。

その時は彼女を引きずり出す以外考えられなくて、問いつめる事は出来なかつた。

でも、その悶々とした気持ちは溜まつていき、どうしようもなく膨らみ、そしてある日彼女の方から声をかけて來た。

「大事な話しが有る。」

と。

結局こういう事だ。

彼女とあいつはただの知り合いつてんじやなく、ヤツてたつて。そう言う仲だつたつて。

中学の時の人との関係は俺たちの今と似ていて、彼はボクシングをし、彼女はそれをサポートする。

ただ大きく違うのは、彼女は畠山に駆さえ提供していたつて事だつた。

彼女。

つづく

第三話 契約（前書き）

痛くて、寒くて、生々しいです。
どんどん酷くなるので、苦手な方は御退出をお願いします。

中坊のセックスなんて。チエリーな俺が言うのも変だが、それって立ちショーンするのと変わんねえんじゃねえのって思った。出すもの出しだけ。別にうらやましいとも思わない。むしろ汚ねえって感じ。する事の無い落ちぶれた馬鹿ガキが大人のふりしているだけだつて。

彼女はそれをしていた訳だ。

勇利の躯はお世辞にも女らしくない。骨と皮と筋肉。女に見えるかと言わっても正直困る。むしろセックスとは限りなく無縁つて感じだつた。

その躯で男を受け入れた?

嘘だと思った。

でも彼女の手は握りこぶしを硬く握りその肩はわずかに震えていて。勇利は辛いとき拳を握る癖が有る。嘘だと思ったかった。

俺の部屋で一人向き合ひながら

「島山の事、今でも好きなのか?」

恐れていた質問をした。彼女は首を横に振ると、俺にひらつと目線をくれた。

「好きじゃない。正確に言つと、そう言つ意味で好きだった事は一度も無い。」

俺達の間に冷えた空気が流れた。

彼女は島山を利用する為に、好きでもない男に抱かれていたんだ。そして彼女が次のターゲットに選んだのは俺だった訳だ。自分が出来ないボクシングをしてくれる、お人形。Jエジヨーみたいな。足を走らせ、手を出させ。

ははははは。

俺は口が渴くのを感じた。

「じゃあさ、俺が勇利にお願いしたら、お前は俺に抱かれるのか？」

彼女は黙つたまま、一層頭を深く垂らした。彼女は答える事が出来なかつた。

目一杯怒りに満ちていた俺はそれ以上考えられる余裕なんか無くて。

「言えよ、ほら。」

俺は彼女の短い髪の毛を掴み上を向かせた。勇利の顔は苦しみで歪んでいたけれど、俺も同じような顔をしていたに違いない。

「それで俺が練習に打ち込めるって言つたら、どうなんだよーー！」

そのとき俺は腑に落ちた。なるほどなつて。彼女が自分の名前を嫌悪した理由がよく分つたつて感じだ。何しろ自分が営業していたんだから。

でも本当は否定して欲しかつた。俺たちは特別で、あんなヤツなんかどうでもいいつて。今の彼女はあの頃より大人で、俺とは心でつながつてゐるつて言つて欲しかつた。肉体なんて、物でしかないと。

「基がそうしたいなら。」

彼女が呟いた。

俺は啞然とし、手のひらから髪の毛が逃げた。

そして用意していたつて分る台詞を言つたんだ。

「コンドームは絶対だぞ。」

つて。

それから細長くて見た目より軽い箱を俺に手渡した。

「いいか、覚えとけよ。その時の俺はダツチワイフだからな。感情とか反応とか、期待すんなよ。この部屋を出てまで関係するのも無しだ。その時の俺はお前の知り合いですらないんだからな。」

「

「冗談だつて言つて欲しかつた。

本氣で彼女を抱きたい訳じやなかつたから。でももう引き返せなかつた。

歯を食いしばりきつく眉を寄せる彼女がどんな気持ちでそれを言ったか手に取る様に分つたから。

それはある意味親友としての究極の選択だつたと思つ。

“ 受けて立つ ”

それ以外無かつた。勇利がその犠牲を払う覚悟なら、俺だつてそれに応えて勝つてやると覚悟を決めた。

「 オッケー。 」

これは、契約だ。

「 俺たち恋人同士じゃないから。好きな人出来たらキレイに別れような。 」

箱を受け取つた俺に彼女は小さく笑つてみせた。

彼女。 つづく

第四話 喪失（前書き）

甘い恋愛の話しじゃ有りません。」注意ください。
よくあるキーワード “ らぶえつち ” とは “ レイプ ”
“ 隸 ” とは異なる意味で、
真逆なストーリーです。

「つむく彼女をベッドの端に座らせ、おそるおそるシャツのボタンを外す。

圧迫するタイプのスポーツブラが現れつづく不思議な気分だった。

“抱かせる”

と言つた割には俺の軀の反応はイマイチで。

服を脱がせるのになつとも協力してくれない彼女に、ああ、人形なんだつて、ともすれば萎えそつた。俺の初体験は人間じゃないんだつて。

これは取引なんだからつて。

俺の知識なんてせいぜい友達の家で見たAV ぐらいなもので、フツーにどうすれば良いのか分らなかつた。

彼女は何の反応もしない。

“止めよう”

でも無ければ先に戸惑つに俺を馬鹿にするでもない。続けるしかなかつた。

とりあえず肩に触れ横にし、それから胸元へ指を這わせる。彼女の左右に広がつた小さな乳房が呼吸にあわせて震えていた。

ああ、生きているんだつて俺は少し嬉しく感じた。その事に氣を良くし、シャツを放り、ジーンズを脱ぎ捨てゆつくりとその上に被さる。

肌と肌がすり合わさり、その瞬間、これなんだつてこの時産まれて初めて分つた。これが男と女つて事だつて。

世界が開けた、そんな感じだ。

ベルベットみたいだつた。『ごつい』した男の俺の躯とは全く違う。温かさと、弾力と。胸に押し当たつてはいる彼女の先端が硬くなり、俺の躯にスイッチが入る。それは溶け出しそうな快感。

初めて重なる勇利の躯は想像していたよりずっと柔らかかつた。わずかにかけた体重に反発する躯。彼女のどの奥から小さな声が漏れ

「重いのか？」

つて俺は聞いた。勇利が首を振るからそのまま体重をかけた。ほんの10分前の俺と今の俺はまるで違う生き物だつた。本能が教えていた。どうすれば良いかを。

肌という肌の全てが触れ合う様に俺は動いた。指先で曲線を味わい、唇でなぞる。日焼けした首筋と、真っ白く日に焼けていない胸のコントラストが眩しかつた。

「キレイだ・・・・・。」

俺は本心からそう思った。不思議なくらい気持ちが高ぶつて、考えられるのはただ目の前の躯だけ。

熱くなつた腹の底が、早く前進しようと急ぐ。

それでもなかなか上手くつける事の出来ないゴムに俺は焦つた。それ以上におかしくて

「俺つてもしかして不器用？」

つて笑つていた。目の端で彼女の少し大きな口元がニーッて動いた気がした。

俺たちは何をやつてんだろう。

そう分つてはいたけど止められなくて。

彼女の全然濡れていない中心に重なつた。

シーツをつかんでいる両手に力が込められ全身が硬く締まり、彼女が唇をかむから、痛いつてこと、分つた。でももう止められない。

俺はそのまま躯の中の膿を吐き出した。彼女に向かつて。

彼女が俺に抱かれた理由は二つ。

俺がボクシングだけに打ち込める様に、この年頃にありがちな欲望の捌け口になる為。

それと多分、罪悪感だ。俺のライバルと寝ていたって事への。

分かっていた事だ。

それでも俺はこの契約で失うものなんて無いと思っていた。お互い手に入れる事があり、俺たちは上手くやつていける、そう思い込みました。

彼女。 つづく

世の中のほとんどの人間には理解できないかもしれないが、俺たちの関係はほぼ完全に元に戻っていた。

俺は普通にしている限りあいつに女を感じるでも無く、あいつが俺を男として意識しているとはとても思えなかつた。

俺たちは1年の頃から互いに

“女房殿”

“だんはん（旦那様）”

と呼び合つていて、それすらも変わらない。

普通に肩を抱き合い、笑つていた。

以前から彼女はたまに俺の家に来て夕飯を作つてくれていて。

トレーナー様曰く、飯は高タンパク、低カロリーが基本だそうだ。勇利の母親は水商売をしていて、食事はいつも彼女が作つてていたらしい。俺の家で作つたものの半分を持つて帰れば良いだけだから特に大変じやない、そう言つて笑つた。

何しろ俺の両親は仕事の都合で北海道に暮らしていて、兄貴との二人暮らしだつたのだ。男所帯の、しかも兄貴は激務のサラリーマンで俺はこんなし。ほとんどまともな飯はカレーぐらいしか食えなかつたから、勇利が飯を作つてくれるのは兄弟揃つて願つたり敵つたりだつた。

とにかく彼女の作るものはなんでも美味かつた。みそ汁でも握り飯でも煮魚でも。

特に面倒くさいと滅多に作つてもらえなかつた豚角は天下の一品で、料亭接待で舌の肥えているはずの兄貴でさえも唸つて食つた。おかげで食料費供給の名目でたっぷり小遣いをせしめる事が出来た。

そして夕飯の仕込みが終わり、後は飯が炊きあがるだけ、という段階で俺は彼女に

「抱きたい。」

とさえ言えば良かつた。

それから先の1時間、俺たちは別の世界の住人になつた。

俺はお人形遊びを。彼女は俺がインターハイで優勝する夢を見る。

そうしていろいろうちに冬になり、俺は部の初詣といつその日女子マネの亜由美にみんなの前で告白されたんだ。

「つき合つている人、いないんですね？お試しでもいいからつき合つて。それから決めてもいいから、ね？」

正直戸惑つた。

勇利とこんな関係でありながら、新しい彼女作るのかつて。

別に亜由美の事が好きだつた訳じゃない。正直言つと何の感情も無かつたから。

でもその時の勇利の顔は笑つていて

「やるなあ、基。」

という声が聞こえそうだつた。だから承知した。

俺が正式な彼女を作ればもう勇利と寝る事は無い。それがお互いの為の様な気がしたからだ。

これで俺たちは普通の親友に戻れる。そつどこかで安堵した。

そのくせ亜由美とつき合ひながら奇妙なほど勇利と比べ、ほんの数ヶ月前を懐かしいと思つた。

亜由美はどこで仕入れてくるのかその手の情報に長けていて。仕草、テクニック、勝負下着。オーラルだつて彼女からして來たぐらいだ。可愛らしいおねだりポーズで積極的な亜由美。

勇利は絶対にしなかつた事のオンパレード。

俺は気持ちよくそれを受け入れた。

だからむしろセックスだけの事じゃ無い。

二人肩寄せ合い下校しながら見た夕焼けや、勇利が台所に立ち力

ウンター越しに俺に話しかける声の響きや、彼女が家にいる時の明

るい雰囲気を思い出していた。

亜由美とソファでいちゃこきながら、同じ所に座りながら勇利と観戦した昔のタイトルマッチを思い出したり。

情熱的な彼女を抱きながら、切なく堪える勇利の幻がちらついた。そして出来るなら、もう一度勇利を、そう願う様になっていた。

勇利を取り戻すのは簡単だつた。

何しろ彼女にとつてボクシングが全てだつたから。亜由美と別れ、彼女にこう言つだけで良かつた。

「俺は勝ちたい。だから協力してくれ。」

と。

そして俺たちの関係はあつという間の元に戻つたかの様に見えた。相変わらずダッチワифな彼女。

彼女。
つづく

第六話 ダッシュワイフ

以前と変わらない関係。

そのはずが、俺は何かが違うと気づき始めた。

躯の付き合いが長いと、彼女の癖、というか、自分の感じ方というのが分つて来て。

勇利の骨に当たる感触、躯の向き、柔らかさ。そう言つたものをしつかり味わいながら抱く事を覚えだしていく。

だのに彼女は一向に変わらない。

申し訳程度に潤い、喘ぎ声一つ漏らさず、微動だにせず。

勇利だけが感じないなんて、おかしいって思った。

そんなある日、ドラッグストアの「GUM」の棚の近くに置いてあったそれを見つけた。

“心も体も温かく触れ合いたい方に”

なんてパッケージには書いてあって。恥ずかしいなんて考えもせず、

そのくせかこの一番下にソレを押し込んでいた。

それをただ寝ているだけの彼女を見下ろしながら手のひらに取つた。

ふわりとライムの香りが漂う。

いつもと違う気配を感じたのか、彼女がはっと上半身を起こして、バランスを崩したそれは俺の手のひらをすべり勇利の引き締まつた下腹にぶちまけられていた。

「やつ・・・・何？」

粘りのあるとろとろとした液体がぬめりながら下へと向かつて流れ出す。

慌てる彼女を体重で押さえ込んだ。

「心配するなよ。変なもんじゃねえし。」

べとべとに汚れたボトルとキャップを拾い蓋を閉めそれを彼女に渡

した。

「お前、ダッチワifだろ？ダッチワifには必要なんだよ、こいつ
いうのが。」

それはラブローション、つまり潤滑油。

「少しばら楽しめよ。」

俺は自分の下半身を使ってそれを彼女の軀になすり付けた。透明の
ジエルが奇妙なほどてかつっていた事を覚えている。

彼女は押し黙り目を閉じるとボトルを枕元に放り、両手で顔を覆
つた。

その肩が辛いって言つてた。本当は俺に抱かれたくないのにつて。
だつて、仕方ないだろう？これは契約なんだから。

それにつもお前が帰つた後、シーツ洗うのが嫌なんだよ。血の
滲んだシーツをさ。

俺が下手だつて事分つてるけど。俺ばつか気持ちよくて、お前は
痛いだけなんて。

こんな俺だけど、それでもやりたいだけのガキみたいにがつがつ
と抱くのだけはしたくなかった。

彼女はダッチワifかもしれないけれど、掛替えの無い親友でも
あつたんだ。

俺の中でもやもやとした感情が渦巻いていた。

それがすつきりと晴れるのはしばらくたつてからの事になる。

抱かれている勇利はまさにダッチワifそのものだつた。

意志の無い軀は俺の望むように体位を替え、嫌を言わず受け入れ
てくれる。足を広げようと膝の裏から手をかけると、例え蠍人形
の様なわずかな抵抗が有つたとしても、無駄な力を加える必要もな
くゆるゆると開いた。床へと引きずり降ろし、後ろ向きにベッドに
向かわせても文句も言わず。

それから、俺の体に腕をまわす事も無かつた。彼女の掌はいつでもシートを掴んでいて。触れているのはいつだって俺以外のものだつた。

キスすらも。

「口、開いて。」

つて俺が言わない限りその奥を見せる事が無い。舌を絡めようにも、そこはぽっかりとした穴が有るだけ。彼女の意志のかけらなんて一つも見つからなかつた。

それが約束だと俺は自分に言い聞かす。

それでも俺は、手のひらに当たるちいさなふくらみを必死になつて愛撫していた気がする。

彼女から得られる反応は、唯一終わつた直後に俺を押し退ける事だけだつた。

俺は汗だくでいつも彼女の上で果てていた。

彼女にとつて重いつてのは分つていてるけど、この時だけは許して欲しかつた。

なにしろ勇利を抱くのはいつだつて死にそうなほどトレーニングした後で、その上全身の力振り絞つてその行為に及んでいた訳で。俺の体力もねじ切れそつた。

荒い息を吐きながら俺は夢と現の狭間を浮いたり沈んだりした。その時だけ、彼女は自分から動く。俺の下から逃げようとして両の手で俺の胸に触れる。最初はそつと優しく。指先で軽くさわる様に。それから手のひらがみつしりと当たり、強く押す。

その瞬間俺の意識は急速に浮上し、体重を加減しながら彼女には絶対にばれない様にその手の感触を味わつた。

「ううう。

とか言つていかにも寝ぼけているかを装いながら。

彼女の指が俺の胸元をかすめる。少しの隙間に引っかかり爪が立

たる。上手くいけば困っている彼女の半開きの口元が肩に当たり、柔らかな唇の内側の感触に痺れる事が出来た。

それから寝返りのふりで彼女を抱きしめる。

反応が遅れ彼女の両手が俺の肩に回る。背中を伝うその指先に鳥肌が立つた。彼女は俺の意識が戻っている事に気がつき、諦めた様に手を広げ再び人形に戻つて行く。

それは俺が勇利を人として抱いていると実感できるたつた一つの時間だった。

彼女。

つづく

第七話 代償（前書き）

ジャンルは文学に位置づけています。
文中から作者の意図が正確に伝わる様に書けていくことを願っています。

第七話 代償

そんな日々が続いた葉桜の季節、その日2回目の行為に至つていた時にそれは起きた。

彼女の反応がいつもと違つていた。心無いいつもより潤い、時々その両足が何かを蹴る様に動く。そんな事は初めてだつた。さすがにその頃になるとゆとりも出てきて、どうすればダッヂワイフを演じているはずの彼女が反応を示す様になるのか僅かながら分るようになつていて。

その時の彼女はいつもの様に下唇を噛み締めながら、でも微かに唸り、突然シーツを手放し両の拳で顔を覆つた。

「・・・・うつ！」

彼女のキツく閉じられた口腔からうつめき声が漏れる。彼女は逃げる様に身悶えた。

「勇利！…」

俺は嬉しさのあまり叫ぶ。そして、強く…

「いやあつ！…」

その小さな叫び声とともに彼女の体は大きく反り返り、打ち震えた。全身に電気が通つたようだつた。俺の視界を血管の浮き出た彼女の拳が遮つていた。同時に俺の胸に何とも言えない暖かい物がこみ上げてくる。そつと勇利の顔を覆つ手をどけて、表情を読む。

「・・・・？」

彼女は何も言わない。ただ泣き出すんじゃないかつて思つほど苦し
そうな顔で俺を見上げると、素早く目を逸らした。

「・・・・たんだな。」

俺は情熱に身を任せた。彼女の両手首を掴み、ベッドに張り付け、
気が狂つたかの様に！

「…！…！」

今まで聞いた事も無いような喘ぎ声が漏れ、堰を切つたかの様に彼

女が溢れ出し、有り得ないほど絡み付き、滑らかに身をよじらせた。

終わった後、俺達はしばらく抱き合つたままで。

彼女はいつもみたいに逃げ出せずにいた。

この時俺は気づいた。本気でこいつの事を好きなんだって。彼女が感じて、初めて俺の心が満足を覚えた。

抱く。出す。それだけじゃ駄目なんだ。

体重ねで、心重ねで愛し合つ。俺にとって勇利と交わすこの行為は愛そのものじゃなきゃいけないんだって。俺の腕の中で彼女が応えてくれないと意味が無いんだって。

涙を誤魔化そうとする勇利の唇にそつと口付けすると、彼女は血の味がした。

もし俺がもう少し出来た人間だつたらこの関係に終止符を打つ事が出来たかもしれない。彼女の為に。心と躯を自由にしてやる事を。でも頭で分つている事と感情や欲望は一致なんかしないんだ。彼女は咲き始めたバラの蕾だつた。匂いたちもうすぐ花ほこりぶ事が分つているのになどうして手放す事が出来る?

俺の躯の下にいる彼女は、俺が咲かした花だつた。その始まりをどうして野に戻す事が出来る?

もしかしたら俺がこの時点で告白をしていたら状況は変わつていたかもしれない。でも俺は彼女に気持ちを告げる事さえしなかつた。恋人としての俺を拒絶されるのが怖かつた事もある。

でもそれ以上に、もし今の時点で彼女が俺を受け入れ本当の恋人同士になつたとしたら、この行為を始めた根本的な意味が変わつてしまつと思つたからだ。

愛したい、愛し合いたい！いくら俺がそう望んでも、彼女に応える為に俺がまずしなければいかないのは、勝つ事だから。

一番最初に犠牲を払ったのは彼女で、その痛みにだけは報いなければいけない。

だから俺は勝ち続けなければいけなかつた。

俺達の関係はそれからも変わらなかつた。
ダッヂワиф。

セックスフレンドにも満たない、そんなセックス。
彼女を抱けば抱くほど、俺の心は空洞のようになつた。それでも、
彼女との約束は果たさなければいけない。

ひたすら、ボクシング。

不思議な事に、ボクシングさえしていれば勇利の事を忘れられた。
たとえ彼女がそばで声援を送つてくれていたとしても。

だから俺は俺なりのやり方で彼女を愛した。

「ゆうり」

それ以来俺はダッヂワифの彼女の名前をその音で呼んだ。いつもの
“コーリ”
の音じゃない。やわらかく

“ ゆうり ”

だ。

好きだと言えないから。愛していると言えないから。せめて名前
だけでも、とい。

現実には、俺の一方的な愛だけが空回りしていたなんて気がつかず
に。

皮肉な事に、結局俺との関係に疲れぼろぼろになった彼女は安息の地へと逃げ込むかの様に他の男と恋に墮ちてしまい、俺たちは高校卒業と同時に全く別の道を歩く事になる。

その男は寒気がするほどの“出来過ぎ君”世の中の男の天敵の様なヤツだった。

俺たちより6つ年上のそのヒリートサラリーマンは、身長180cmの長い手足にウイングチップとポールスミスのスーツを身につけて。酒を飲んでも飲まれる事は無く、愚痴さえ言わず、人の話しを良く聞き。暇ができると

「他にいく所も無い。」

からとスポーツクラブに通う。厳しい割には寛大な性格で、誰に対しても態度を変える事が無く。端正なお顔立ちはいつだってクール、艶のある声はいつも穏やか。唯一兄貴が声を荒げる事があるとすれば、勇利を相手にする時だけだった。

正直、忘れる事は出来ないけれど。でもその想いを乗り越え今の俺がいる。

彼女。 Hピローグへ つづく

「もとちい、おなかすいたあ。」「

ほんやりと昔を懐かしんでいた俺の服の裾を息子が引っぱり、わくわく、と言つた目で俺を見上げていた。

俺の嫁は料理がからつきし駄目だった。今でこそ食えるものを作れる様にはなつたものの、やっぱり俺の作る料理の方が美味しい事に変わりはない。

今日のメインは豚角煮。塩で炒めたチングンサイと息子が剥いたゆで卵を添えて。

「ママには内緒な。」

俺はほろほろになつた肉の一切れを裕也の口に入れてあげる。すると「裕也、良い事教えてあげる。それね、もとちいの初恋の味なんだよ~」

嫁がカウンターの向こうから声をかけた。

「美味しいでしょ。」「

彼女はにせにやと笑い俺をからかう。

俺の過去を知つて勇利を忘れなくとも良いと言つてくれたのは彼女だ。恨み、憎しむのではなく、俺同様、勇利も必死だつたつて事をむしろ暖めるものだと。

俺は彼女に救われた。

その事に涙がこぼれそうになる。

彼女は自分以上に俺を理解していくくれていた。

俺たちが過ごした時間は決して無駄じやなかつたんだと、結果はどうあれ、全力で生きていた輝いた季節だつたんだと初めて自分を納得させられた。

「無駄な恋愛なんて無い。それが有つて、今の自分がいるんだから。」「

つき合ひう前の嫁はよくそつ俺に話して聞かせた。今ならその意味がよくわかる。

「お前がも少し大人になつたら、作り方教えてやるよ。なにしきお前の“もとちい”は天才だからな。」

皿を運びながらそう言つと、息子は晴れやかな顔をした。

「うんっ！ママより天才！」

「いらん事、子供に言うなあ！」

いらないことを言つた本人がそう吠える。

「罰。ご飯終わつたらハーゲンダッツ買って来て。ストロベリーとバニラね。」

つわりの落ち着いた嫁は良く食つようになり、以前にも増して笑う様になつた。

そして彼女の笑顔に、今の俺は支えられている。

彼女。

Fin

ハピローケ（後書き）

もう一度読んでみたい。そう思って頂ける作品を書いていたら良いな、そう願います。

読み難い話しだったと思いません。

ここまでおつき合っていただきありがとうございました。

廣

瀬 流が留

あの、良かつたら感想ください・・・、お待ちしてあります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8989d/>

彼女。

2010年10月9日15時45分発行